

日本科学者会議

京都支部ニュース 10月号 No.476

2023年10月13日発行

〒604-0931 京都市中京区二条通寺町東入榎木町 95-3 延寿堂南館 3階

Tel/Fax : 075-256-3132

E-mail : jsa-kbranch3132@mbox.kyoto-inet.or.jp

URL : <http://web.kyoto-inet.or.jp/people/jsa-k/>

ゆうちょ銀行振替口座 加入者名: 日本科学者会議京都支部 口座番号: 01050-6-18166

ゆうちょ銀行総合口座 加入者名: 日本科学者会議京都支部 口座番号: 14480-2800181

上記総合口座を他金融機関からの会費振り込みの受取口座として利用される場合は以下の内容を指定して下さい。

店名: 四四八(読み ヨンヨンハチ) 店番: 448 預金種目: 普通預金 口座番号: 0280018

目次

- ・京都支部「会員現況アンケート」のご協力のお祝い……………2
- ・『日本の科学者』読書会9月例会(9/18)の報告「日本におけるインクルーシブ教育の動向と発達保障」……………3
- ・ひきこもり学会 10・1 シンポジウムの報告(森下博)……………5
- ・京都支部第4回市民講座「カーボンニュートラルの科学」の案内……………6
- ・支部主催・関連行事案内……………8
- ・支部幹事会だより……………8

＜今年度会費の早期納入のお願い＞

今年度会費の納入率は9月30日現在77%となっています。引き続き今年度会費(一般会員:14,400円,特別会費会員:7,200円,家族割り会員:4,200円,若手会員:4,200円)の早期納入にご協力くださるようお願い申し上げます。過年度分の未納会費がある方は、あわせて納入いただきますようお願いいたします。

なお、ご不明な点につきましては、支部財政担当幹事・細川孝宛にメールでお尋ねください (Email アドレスは、hosokawa@biz.ryukoku.ac.jp)

(支部財政担当幹事)

京都支部活動活性化のためのアンケートにご協力ください

京都支部幹事会

5月の支部定期大会でも参加者より意見が出されましたが、支部活動の活性化のためには、大学・研究機関の現場での現役会員・若手会員の拡大強化が急務です。しかし、旧来の分会中心の活動が困難になって久しく、支部幹事会としては大学や研究現場との連携が困難になっています。つきましては、この度、支部会員アンケートを実施して、会員のポテンシャルを最大限生かすために、会員の皆さまの現況を把握したいと考えました。

現在、支部会員の約7割の方に、電子メールでの情報提供が可能となっていますが、メールアドレスを更新された方、新たにアドレスを取得された方は、これを機に、ぜひ電子メールでの機敏な情報提供が可能となるよう、ご回答をお願いいたします。

メールアドレスをお知らせいただいている方には直接アンケートの記入サイトをお送りいたしますが、下記にアクセスしてアンケートにお答えいただいても結構です。

アンケートサイトの URL : <https://forms.gle/U5kFXd8x9C54Ae1H9>



設問は、次のような簡単なものですので、何卒よろしくお願い申し上げます。
～JSA 京都支部会員アンケート～

電子メール活用による支部活動活性化のために

* 必須の質問です

メールアドレス：

1. 京都支部の諸活動の連絡を受け取るために上記以外のアドレスを登録したい場合は、そのアドレスをご記入ください。
2. ご自身の興味のある専門分野などについてご記入ください。
3. 大学・研究機関とのつながりについて、現況をお選びください。
 - 1) 現在、大学・研究機関に勤めている。
 - 2) 大学・研究機関を退職しているが、その職場の現役の方とつながりがある。
 - 3) 出身組織ではないが、現役の方とつながりがある。
 - 4) 現役の方とは直接のつながりがない
 - 5) その他
4. 上記で1, 2, 3を回答した方は、大学・研究機関名を教えてください。
5. 京都支部の活動について、自由にご意見をご記入ください。

『日本の科学者』読書会9月例会(9/18)の報告

9月号特集:「日本におけるインクルーシブ教育の動向と発達保障」

近藤真理子

今回の読書会は、9月18日(月)15時より17時30分まで、龍谷大学大宮学舎とハイブリット開催で実施されました。参加者は10名。登壇者は執筆者の窪島さん、伊井さん、加茂さんの3名です。インクルーシブ教育にスポットを当てた時、いびつな構造の中で、子どもの育ちの権利の保障がされていないことが各報告者から明らかにされ、活発な議論となりました。

特別支援教育の対象が特殊教育の対象の子どもたちだけでなく、発達障害を含む様々なニーズを持つ子どもたちの対応が求められていることでの現場の大変さの報告もありました。通常学級における「気になる子ども」のニーズに応じる時、どうしても集団への適応や多動など目に見えやすい行動上の問題に着目がされることが多いのですが、子どもの困難さは、目に見えるものだけではないし、学習面や学習の理解の過程における問題や発達の凸凹だけでなく、様々な理由から心に葛藤を持つ子どももいます。彼らを特別なニーズのある子という認識ができて、通常学級でこのニーズに応じていくにはまだまだ不十分です。乳幼児期、学校、放課後と様々なニーズをどう包括し、受け止めていくのかを考えていく必要があります。

窪島務「障害者権利委員会『勧告』とインクルージョンの国際的議論の動向」

(報告者:窪島務)

日本における障害者権利委員会の勧告を見ると、インクルージョンに対する日本政府の姿勢をはっきりさせること、つぎに権利委員会の勧告を正しく評価することが大切だと思っています。前者については、文科省は通常学級をインクルーシブにすることは全く考えていないという単純なことに、多くの研究者が無批判でいることを指摘しました。後者については、権利委員会が特異なフル・インクルージョンイデオロギーについて勧告を行っていることについて、『日本の科学者』で指摘しました。この点もあまり日本では指摘されていないことです。執筆中

から、権利委員会のフル・インクルージョンのイデオロギーが新自由主義と類似していることが気になって、新自由主義について勉強を始めています。権利委員会は、通常学級しか認めていない上に、カリキュラムの修正を認めていません。これは学力スタンダードと同じです。又、福祉、教育の現場のニーズに基づいた特別の場の保障を全面否定します。これは福祉的政策の否定ですが、新自由主義以上です。福祉作業所を否定して通常の労働市場の競争に投げ込むことは、新自由主義と同じです。ただ、今のところ、哲学的背景に共通点があるのか、たまたまの一致なのかはわかっていません。いずれも、障害者の特別のニーズを権利としてとらえる志向性がないことは共通しています。やりたい仕事

は他にあるので、あまり突っ込むつもりはありません。『日本の科学者』編集委員会には、こうしたことを考える良い機会を与えていただいたことに感謝しております。

伊井勇「障害のある子どもが育つ地域社会の状況—放課後等デイサービスに着目して」 (報告者：伊井勇)

京都支部の9月読書会において、地域社会におけるインクルーシブの実態を把握するために、放課後等デイサービス（以下、放デイ）に注目した報告をさせていただきました。放デイのガイドラインでは3点の基本的役割が示されており、そのうちの1つに「共生社会の実現に向けた後方支援」があります。ここでは、「子どもの地域社会への参加・包容（インクルージョン）を進めるため、他の子どもも含めた集団の中での育ちをできるだけ保障する視点が求められる」と言及されています。このように障害児の地域生活にとって、放デイは重要な役割を果たすと考えられるため、今回は放デイに着目しました。また、放デイは、2012年により創設されて以降、利用者と事業者の増加が顕著となっています。本報告では、特に官庁統計や外郭団体等の数量データから放デイの全体的な様相を捉えるとともに、新聞記事を参照し、どのような点が制度の課題となっているのか、などを検討しました。検討を通じ、次の点を本報告のまとめとしました。

放デイの量的拡大は、学校でも家庭でもない「第三の居場所」を身近な地域社会に拡充させることに寄与したと考えられます。また、実質的には家族などの私的な負担を含み潜在化していたニーズが、制度の利用に結びついたことは、障害児と保護者の生活に果たし

た役割があると考えられます。しかし量的に拡大する一方で、発達支援の質に関する問題などが浮上しています。また、制度の利用者をどのように設定していくか、などが問われています。

今回の報告では、ご登壇者の窪島務先生、加茂勇先生、司会の近藤真理子先生に大変お世話になりました。また、藤本文朗先生、清水民子先生からコメントをいただけたことも非常に嬉しく思っております。ありがとうございました。

加茂勇「21世紀の障害児文化の変化と課題」 (報告：加茂勇)

私は、教員になって特別支援学校、小学校通常学級、特別支援学級と様々な場での担任をしてきました。

2007年の特殊教育から特別支援教育への転換は通常学級において、障害などにより困難をかかえた子どもと正面から向き合い教育実践をつくっていくことだと思われていました。しかし、本来それと整合するはずのインクルーシブ教育システムが確立するに従い、子どもが年々減少しているにもかかわらず、特別支援教育対象の子どもは増え続けてきました。

私は、特別支援教育対象の子どもが増えるということは、支援が広がるという意味で、プラスもあると思っています。ですが、気になるのは、通常学級がきつく苦しいと感じる子どもが増えていることです。さらに怖いことは、通常教育が寛容のないものへと変質していることです。結果として、零れ落ちる子どもが増えているのです。

これらは、特別支援教育にかかわってきた実践者には、当たり前を感じる共通体験とな

っていますが、残念ながら一般的には伝わっていません。それが伝わらないのは、実践レベルでの交流がないこと、教育現場の姿が（研究者も含めて）伝わっていないことではないでしょうか。学会等のジャーナルを見渡した時、実践論文というものの自体の価値が減っているのか、掲載がなくなっていっていることに危機を感じています。そういう意味では、「日本の科学者」の果たす役割は、非

常に大きいはずで

常。今回の報告では、近藤先生、窪島先生にお世話になりました。また、読書会では執筆者の伊井さんはじめ、多くの参加者からアドバイスをいただきました。語る場があることが、大切だということを再認識しました。ありがとうございました。

ひきこもり学会 10・1 シンポジウムの報告

森下 博

シンポジウムに 100 名参加

10月1日(土)堺市総合福祉会館において、ひきこもり学会主催のシンポジウムが開催されました。参加者は、オンライン参加者も含め約 100 名でした。『ひきこもっていても元気に生きる』(2021年6月新日本出版)が発行された翌年の2022年4月29日には、シンポジウム実行委員会主催(会場:大阪経済大学)の当事者が中心となった交流会が開催されました。その交流会では「当事者」の思いと「親・支援者」の思いとのズレの問題が多く語られていました。

大阪発の「学会」立ち上げ

ひきこもりが社会問題化して 30 年経った今も、日本には「ひきこもり学会」が存在しません。自分たちの手で憲法の理念に基づく、当事者の声をもとのした学会をつくろうと議論を重ね、2022年、昨年9月に「定款」を作成しました。2023年1月にホームページも開設し、大阪発の「学会」を立ち上げ、オ

ンラインでのひきこもりの当事者をつなぐる学習会も開催をしてきました。

従来の学会の概念にとらわれない学会

私たちの学会は従来の学会の概念にとらわれず、学者や研究者だけでなく、当事者・親・支援者の誰でも自由に参加できること特徴としています。学会費も500円で大きな基調講演はせず、自分たちで学会の内容を創っていくことを大事にしています。

ひきこもり学会設立後初のシンポジウム

今回のシンポジウムは、ひきこもり学会設立後初の開催となりました。「親でも、しんどいって言える場所がほしかったんよ」を親に焦点を当て、切実な思いを語り合うことをメインテーマにおきました。

当日報告者4名のそれぞれの思いをまとめた資料が参加者にも配布されました。その内容は親子の葛藤や、時として格闘してきたそれぞれの親子の歴史、親の居場所探し、それぞれの地域での社会への働きかけへの困難

さが報告されました。

立場の違いを超えて、現状の理解と協力の輪を

その中にはわが子の成長に気づいた時の喜びについての報告とあわせて、親の苦しみを理解してくれない関係機関や行政への不信感から批判的・攻撃的になっていた過去を見直し、行政や関係機関と立場の違いを超えて、現状の理解と協力の輪を広げていくことのできる努力をするように変化をしたことで、関係ができてきたという経験が報告されました。

市長はじめ福祉の担当者も参加

そうして、「葛藤」や「格闘」を乗り越え、理解を求めてきたことが、当日市長さん、福祉担当者の分科会参加されにつながっていました。このことには驚きました。5つの分科会では、自己紹介の後、日ごろの思いを語り合う報告会となりました。活発で正直な思いが多く語られていたことが印象に残りました。

最終的に目指すべきは「ひきこもり」が問題にならない社会を

全体の会の中で、不登校当事者で研究者である参加者が社会学の立場から「昭和に生まれた家族主義や競争社会によって作り出された常識を見直す必要があるのでは」との指摘をしました。『ひきこもりの30年を振り返る』（斎藤環氏らの対談集）の冒頭で、「最終的に目指すべきは「ひきこもり」が問題にならない社会である」との指摘がされて、30年の時間的経過があったことを感じました。

障害児教育の義務化の夢の実現に100年、連帯には時間が必要

最後に、閉会にあたって藤本文朗氏が「戦前からの障害児教育の義務化の夢が1979年に実現した。実に100年かかっている。立場の異なるいろいろな人々との連携するには時間がかかる。このひきこもりについての理解も必ず乗り越えられる」と述べました。今回のシンポジウムは、今後の学会のあり方、進み方の示唆を示し、参加者への勇気と希望となったのではないかと感じました。京都支部の皆さまには、チラシの封入や記事掲載、後援など本当にお世話になりました。ありがとうございました。（文責 森下博）

京都支部第4回市民講座の案内

「カーボンニュートラルの科学」（ハイブリッド開催）

日時：11月8日（水）19:00-21:00

会場：龍谷大学大宮学舎 東翼 302 教室

<https://us02web.zoom.us/j/84380075888?pwd=M3pvYm5ic3R6YVdMWGtKN0VFcmlRQT09>

ミーティング ID: 843 8007 5888

パスコード: 805508

<第1 講演>

「カーボンニュートラルへのバイオマス貢献—太陽光発電と植物光合成によるエネルギー蓄積を比較する—」

講演者 飯塚 泰雄 氏 (元京都工芸繊維大学工芸科学部)

<講演概要>

2050年カーボンニュートラル実現に向け、太陽エネルギーを再生可能エネルギーとして化石燃料に代替することを念頭に、太陽光発電による電気、発電した電気の $\text{H}_2 \rightarrow \text{NH}_3$ へ変換、燃料エネルギーとして活用する動きが始まっている。植物は、光合成作用によって、太陽光を吸収しつつ空気中の CO_2 と H_2O からブドウ糖 $\text{C}_6\text{H}_{12}\text{O}_6$ を合成、再生可能エネルギーとして蓄積するとともに、C-H結合を含む有機物を合成することから化石燃料に替わる新たなエネルギー源、次世代の化学工業原料としてバイオマスを活用する動きも始まっている。太陽電池にしる、バイオマスにしる、日本国土に注がれる太陽エネルギーが基になっている。本講演では、最初に日本国土に一年間に注がれる太陽エネルギー総量を概算し、我が国における一年間のエネルギー総消費量と比較する。次いで太陽電池を用いて日本の全エネルギー消費を賄う場合、必要となる設置面積の計算結果を紹介する。その後、森林によるエネルギー蓄積、 CO_2 吸収量などについての概算からカーボンニュートラル実現に向け、バイオマスがどれくらい貢献できるかを考えたい。

<第2 講演>

「 CO_2 選択透過膜の開発とカーボンニュートラル分野への展開」

講演者 岡田 治 氏

(株)ルネッサンス・エナジー・リサーチ 代表取締役社長

一般社団法人 先端膜工学研究推進機構 理事

(元神戸大学大学院科学技術イノベーション研究科 特命教授)

<講演概要>

CO_2 分離・回収プロセスは、化学や石油精製分野の水素製造プロセスで CO_2 を除去するという点で重要な役割を果たしているだけでなく、近年地球温暖化対策技術としても注目されている。しかし、既存の代表的な CO_2 分離・回収技術である化学吸収法やPSA (Pressur Swing Adsorption: 吸着剤を用いた CO_2 分離・回収技術)等はいずれも高価・大型な設備が必要であり、かつエネルギー多消費型のプロセスであるため、普及が進まないだけでなく、 CO_2 除去の段階で大量のエネルギーを消費するため、地球環境対策技術としては大変問題が多い。一方、 CO_2 選択透過膜による膜分離法では、 CO_2 分離工程でのエネルギー消費を大幅に削減することが可能となる。既に、バイオガス分野では実用化段階に進んでおり、今後幅広い分野への応用展開が期待される。ここでは特に早期実用化が期待されるカーボンニュートラル分野での開発・実用化状況を紹介する。

支部主催・関連行事案内

1. 京都支部 10月読書会(ZOOM)

日時:10月17日(火)15:30-17:30

特集 2023年 8月号「核戦争を許さない」

富塚論文(坂本)／館野論文(左近)／海保論文(前田)

<https://us06web.zoom.us/j/87046531285?pwd=7lxRMxNZqZrbvfF8RB8iTQ4TNC8rz6.1>

ミーティングID: 870 4653 1285

パスコード: 866378

2. 生かそう憲法, 守ろう9条 11・3憲法集会in京都

日時:11月3日(月・祝)13:30~15:00(開場13:00)

場所:円山野外音楽堂(オンラインでも配信予定)

メイン講師:猿田 佐世 氏(弁護士, 憲法行脚の会, 新外交イニシアティブ代表)

主催(共催):憲法9条京都の会, 9条改憲NO全国市民アクション・京都

企画運営:11・3 憲法集会実行委員会

3. 京都支部主催 第4回市民講座

「カーボンニュートラルの科学」

日時: 11月8日(水)19:00-21:00

会場: 龍谷大学大宮学舎 東翼 302 教室(ハイブリッド開催)

ZoomURL

: <https://us02web.zoom.us/j/84380075888?pwd=M3pvYm5ic3R6YVdMWGtKN0VFcmRHQT09>

ミーティング ID: 843 8007 5888

パスコード: 805508

◆◆◆◆ 支部幹事会だより ◆◆◆◆

1. 会員の現況(10月1日)

一般会員: 168

特別会費会員: 3

家族割り特別会費会員: 2

若手会員: 11

【会員合計】 184

読者: 3

2. 会費納入状況(9月30日現在)

一般 133/168(前納の6人を含む) 特別 2/3 家族 2/2 若手 5/11

2021年度未納会費(2022年度は納入) 一般 2

3. 2023年9月決算

2023 年度累計		2023 年9月決算	
収入累計	2,142,114 円	9月収入合計	78,650 円
支出累計	1,428,928 円	9月支出合計	138,657 円
収支累計	713,186 円	9月分収支	△ 60,007 円
前年度繰越金	200,451 円	前月繰越金	973,644 円
9月末残高	913,637 円	9月末残高	913,637 円